「台風１９号による被害を受けた子どもとその保護者への支援事業」
事後評価報告書

特定非営利活動法人ながのこどもの城いきいきプロジェクト

２０２３

目次

１．基本情報	１
２．事業概要	１
３．事後評価実施概要	３
４．事業の実績	７
５．事業の成果	２７
６．事業の成功要因と課題	３９
７．結論	４０
８．提言	４３
９．知見、教訓	４４

１．基本情報

本事業の基本情報は以下のとおりである。

実行団体	特定非営利活動法人ながのこどもの城いきいきプロジェクト
事業名	台風１９号による被害を受けた子どもとその保護者への支援事業
資金分配団体	特定非営利活動法人ジャパン・プラットフォーム
資金分配団体事業	通常枠：災害支援事業（防災・減災事業、緊急災害支援）
事業の種類	災害支援事業
実施期間	２０２０年６月～２０２３年３月
事業対象地域	長野県長野市

実行団体である特定非営利活動法人ながのこどもの城いきいきプロジェクト（以下こどもの城）は、１９９８年、長野市において子どもの健やかな成長を目指して、任意団体「ながのこどもの城づくりを進める会」として発足したのが始まりである。子どもや子育て中の保護者に対して、子ども支援・子育て支援に関する事業に取り組み、いきいきとした子どもたちの世界を守るために行政や地域社会と連携し、子育てを支えるネットワークとその中心となる場づくりを進め、子どもの健全育成及び子育て環境の充実に寄与することを目的としている。２００２年に特定非営利活動法人となり、「長野市もんぜんぷら座こども広場じゃん・けん・ぽん」の指定管理者、「長野市ファミリー・サポート・センター」、「ホームスタート・ながのこどもの城」、「チャイルドラインながの」の運営等多くの機能を持ち、包括的な子ども支援・子育て支援事業を行っている。

令和元年東日本台風（以下台風１９号）により、千曲川決壊という大きな被害を受けた長野市北部において、こどもの城初めての災害緊急支援に突然、取り組むこととなった。本事業は、地元の子ども支援団体として、緊急支援から復旧復興支援へと支援を継続し、被災した子どもたちの立ち直りを支えるために計画した事業である。

２．事業概要

１）事業の背景

台風１９号により、長野市では全壊１，０３３件、大規模半壊３５１件、半壊１，２８７件、一部損壊１，１３６件と甚大な被害を受けた。半年たった令和２年３月においても、仮設住宅や修繕中の自宅の２階などで不自由な生活を余儀なくされる世帯が多く、子どもも保護者も精神的な不安を抱え、被災から立ち直るまでにはまだまだ時間がかかる状況であった。更に新型コロナウイルス感染症（以下コロナ）拡大予防のため、３月３日から全国一斉休校となり、卒業式を目前に通学すらできず、子どもや保護者は２重の困難におちいった。

長野市災害復興計画には、子どもの通学や心のケアとして学校現場へのスクールカウンセラーの配置、子どもや保護者の居場所の必要性は示されているが、早々の予算化は難しい。また、コロナ感染予防のための休校は、ようやく６月１日に解除され、分散登校が始まろうとしていた。当時、長野市教育委員会では、長野市内小中学生にタブレットの配布を年度中に予定していたが、予算や時期は未定のままであった。

２）事業の目的（事業によって解決を目指す社会課題）

台風１９号の緊急災害支援には、県外から多くの団体や個人が駆け付け非常に多くの支援を受けることができたが、復旧復興という長期にわたる回復を外部に頼ることは難しい。そこで、地元の子ども支援団体として、復旧復興期の子どもを支えようと本事業を計画した。

３）対象とするグループ

直接的対象グループ	長野市北部地域　台風１９号被災の子ども 子ども（幼児～高校生）：のべ２，１６０人
間接的対象グループ	長野市北部地域　台風１９号被災の子どもの家族 保護者を含む家族：のべ８，６４０人

４）目指す成果（アウトカム）

中長期的に目指すのは、「長野市北部地域において、子どもや保護者が心の元気を取り戻し、地域の復興に一歩を踏み出せること」である。そのため、本事の成果として、次の４点を目指した。

（１）長野市の台風１９号の深刻な被害を受けた長野市北部地域で、子どもがストレスを軽減している。

（２）長野市の台風１９号の深刻な被害を受けた地域で、子どもが健やかな成長の機会を得ている。

（３）本事業を通して、地域の人たちとのコミュニケーションの場や学習の機会を得ることで、子どもたちが自らの生き方に主体性を持ち、積極的に社会に参画していけるようになる。

（４）台風１９号の深刻な被害、コロナ禍と続く中、子どもが家庭で伸び伸び過ごしている。

５）活動概要

短期の成果で挙げた４つの達成を目指し、（１）子どもの居場所、（２）リフレッシュプログラム、（３）保護者のサポートを３つの柱とし本事業の活動を計画した。

（１）子どもの居場所の設置と運営

大きく分けて、幼児から小学生を対象にした子どもの居場所と中高生を対象に学習支援を行った。子どもの居場所においても宿題など学習をサポートすることもあり、また、学習支援の場は参加する生徒には居場所でもあり、子どもが安心していられることに配慮した。

（２）リフレッシュプログラム

夏休みにはDAYキャンプとして日帰りのイベントを、クリスマス前には善光寺の宿坊に宿泊することをメインとする一泊二日のイベントを開催し、子どもたちが日常を離れ、まさにリフレッシュの機会を設けた。

（３）子育て中の保護者の居場所の運営と傾聴活動

避難所での子どもの居場所や避難所閉鎖後の週末の子どもの居場所を続ける中で、保護者から折に触れ相談や話をしていくということがよくあった。自宅の修繕や仮設住宅での暮らしが落ち着きつつあり、年明け１月８日には長沼小学校仮設校舎での授業が始まり、ようやく間借りしていた他の小学校ではなく自分の小学校に通えるようになった。しかしながら、１月末から２月にかけ、コロナ感染の心配が急速に広がり、３月２日には全国一斉休校が政府により通達されるなど、被災からの復旧復興へと向かいがたい状況となり、保護者の不安や心配も大きかった。そこで、保護者の居場所として、心を落ち着ける場を設け、傾聴活動を計画した。

６）持続発展（出口戦略）

本事業終了後、台風１９号による災害支援は終了するが、緊急支援を含め４年半の取り組みから、次の２点の活動への展開が計画されている。

・常設の子どもの居場所の設置・緊急時の子ども支援のため、平時における子ども支援団体や関心を寄せる個人のネットワーク構築

・ 常設の子どもの居場所

本事業の３年間は、台風１９号の被災からの復旧復興でもありコロナ禍にさらされた３年間でもあった。被災で傷ついた心の元気を取り戻すことをサポートするため、安心安全な場を提供してきたが、子どもが直面する不安や心配は被災だけではない。コロナで教室での勉強がタブレットを用いた自宅学習になり、またお友だちとなかなか会えず、外遊びもままならない中、様々な葛藤や不安、心配を抱えていることもある。そこで、常設の子どもの居場所を、被災地域からは少し離れるが、本事業終了後令和５年度から、長野市の中心部に設置する。

週末の子どもの居場所を利用していた子どもや保護者には、最終日に開催したクリスマス会兼お別れ会で、この事業を終了しても、長野市で活動を続けていること、いつでもそこ（事務所のある「もんぜんぷら座」）にいること、何かあれば連絡をと伝えた。

・緊急時の子ども支援のためのネットワーク

緊急支援に取り組む中で、災害の発災直後から子どもや保護者に必要な支援を届けられるのは、被災地に最も近い地元の団体である。刻々と変化する緊急時に必要な支援を提供するには、１つの団体では難しく、行政を含め幅広い団体や個人との連携が不可欠である。また、緊急時には外部の支援団体が長野市に入り緊急支援活動に取り組むが、復旧復興というと継続して子どもの立ち直りを支えるのは、地元の団体がほとんどであり、３年間の本事業を通じて様々な協力を地元の団体から得てきた。こういった経験をもとに、地元の連携が不可欠だと実感している。本事業２年目には、復旧復興支援である本事業に取り組みながら、令和元年東日本台風被災への緊急支援の振り返りなど、長野市で災害時の子ども支援に関心をもつ団体や個人と学習会と交流会の機会を別途設けた。本事業の終了は、災害支援に一区切りとなる。災害支援から防災、平時の備えへと展開していく中で、学習会や交流会が「長野市緊急時における子ども支援ネットワーク」へとつながり、２０２３年２月に設立された。本事業終了後は、緊急時に速やかに子どもを守ることができるよう、平時の備えに取り組む。

３．事後評価実施概要

１）実施概要

（１）どんな変化をこの事業の重要なポイントとして設定し評価を実施したのか

【留意点】本評価は事業計画時には保護者をはじめ関係者へのインタビューを計画していたが、コロナ禍によりインタビューはスタッフにとどめ、参加した子どもや保護者他は３年間のアンケートに記載された自由記述によった。

重要なポイントとして設定したのは、子どもの声や感想とともに、子どもの変化を保護者やスタッフがどのようにとらえているか、である。

本事業は、令和元年東日本台風１９号の被害を受けた子どもを支援しようと、初めての緊急支援に急遽取り組んだこどもの城が、緊急支援に続く復旧復興支援として実施した事業である。主たる対象は、その緊急支援で実施した避難所の子どもの居場所や週末の子どもの居場所を利用した長沼小学校の子どもたちである。千曲川決壊により校舎が被災してしまい、他の小学校で間借りした教室で学んでいたが、２０２０年の年明けにはようやく仮設校舎に通学できるようになり、自分たちの長沼小学校に通い普通の生活への一歩を踏み出した。その矢先に、コロナの感染拡大などにより卒業式や学年の終了直前に休校となり、だれもが予測のつかない状況となってしまった。子どもだけでなく保護者も、子どもの安全や学習、日常生活の変化に不安は深まる一方であった。子どものストレスは、被災で受けたものだけでなく、コロナ禍による休校や外遊びの禁止、お友だちに会えない等々、計り知れない。子どもの健やかな成長を支えるため、本事業は、

子どもが安心安全に集える場所の提供や発散の場として、日常と離れて自然や地域の文化、何より様々な地域の方々と出会い、思いきり遊び楽しみ学ぶ機会の提供を目的に計画された。それぞれの活動の事前事後の変化を、子どもや保護者の感想や満足度、スタッフの観察などから検証した。

子どもを取り巻く環境、特に子どもに最も近い保護者もまた、被災からの生活再建や収束の見通しの立たないコロナ禍への不安、ステイホームやタブレットを用いた自宅学習といった子どもの学習環境の変化と、心配や不安を抱えていた。保護者へ寄り添うことも、子どものストレス軽減を促す一つであるという認識のもと、本事業を通して見られた保護者の意識、本事業への感想や満足度の変化にも注目した。

（２）どんな調査で測定したのか

活動中、こまめに取られた子どもや保護者へのアンケート、打合せ・会議の記録、活動報告を主なリソースとし、本事業のスタッフにインタビューを行った。「達成度」・「波及効果」・「事業の効率性」を主な項目とし、「連結性」・「持続可能性」・「有効性」・「インパクト」・「効率性」といった視点からＡからＤの４段階（A=たいへん良い　B＝概ねよい　C=検討が必要　D＝見直しが必要）で評価した。調査概要は以下の通り。

【定量的な評価】
①調査方法
アンケート調査（２０２０年６月～２０２３年２月に取られた、それぞれの活動の事前事後や長沼小学校教員や長沼小学校に通う児童の保護者、対象地域にある豊野中学校生徒アンケート）、会議・打合せ議事録や活動記録の確認

②調査実施時期
２０２３年２月～３月

③調査対象者
各活動に参加した子どもとその保護者、主対象となる子どもの通う長沼小学校教員を対象とし、回収率は４０－１００％と活動によってばらつきがあった。

④分析方法
単純集計、活動に関する質問と日常の様子についてクロス集計を行った。

【定性的な評価】
①調査方法

・アンケート調査（記述）、長沼小学校教員や児童からの手紙、スタッフインタビュー、打合せ・会議議事録の確認

②調査実施時期
・２０２２年２月～２０２２年３月（アンケート等は２０２０年６月～２０２３年２月に実施、長沼小学校教員や児童からの手紙は２０２３年３月に届いたもの）

③調査対象者
・各活動に参加した子どもとその保護者、長沼小学校教員、こどもの城担当スタッフ

④分析方法
・調査から得られた言葉やエピソードを整理し、KJ 法により分析した。

（３）調査結果をどのように深掘りし価値判断をしたのか

子どもと保護者の回答のクロスチェック、子どもの回答とスタッフの観察のクロスチェック、自由記述の KJ 法による分析から、子どもの言葉だけでなく子どもの最も身近な保護者にどのように受け止められていたのかを深堀した。また、子どもが緊張や懸念、気を使いすぎずに参加できたか、さらには伸び伸びと参加できていたかを保護者アンケートやスタッフインタビューから、活動が子どものストレス軽減や健やかな成長に貢献できたかを判断した。

２）実施体制（内部/外部、評価担当役割、氏名、団体・役職）

外部　評価主担当　中島美穂
　　開発支援・緊急災害支援コーディネーター
　　アジアを中心に教育・保健・生計向上・環境等の開発支援、ヨルダンでの難民支援、令和元年台風１９号をはじめ国内災害事業に従事。現在は子どもの社会支援的支援（PSS）に取り組んでいる。

内部　特定非営利活動法人ながのこどもの城いきいきプロジェクト
　　事務局長兼事業統括　小笠原 憲子
　　会計責任者兼事業統括補佐　伊藤 直子
　　コーディネーター　廣田 宜子
　　アシスタント　寺澤 夏海

４．事業の実績

１）　インプット

	計画時	実績値
人材	内部：合計１０人（担当者３人、保育士２人、助産師・看護師２人、栄養士１人、臨床心理士１人、小児科医１人） 外部：６人	内部：合計**１１**人 事業統括１人、会計責任者１人、コーディネーター１人、アシスタント１人、保育士２人、助産師・看護師２人、栄養士１人、臨床心理士１人、小児科医１人
資機材	・タブレット ２０台リース、１０台購入 ・缶バッチ作成資機材	・タブレット ２０台リース、１０台購入 ・缶バッチ作成資機材 ・プロジェクター ・スクリーン ・シュレッター ・ワイヤレスアンプ ・ワイヤレスマイク ・ダイナミックマイクロホン ・ワイドレス WEB カメラ ・コミュニケーションマイクスピーカーシステム
資金	契約時の助成金総額 ３３，２６０，９６８円	実際に投入した助成金総額 ３６，８６０，９６８円
	契約当初の自己資金計画金額 １，５００，０００円	実際に投入した自己資金金額 ５０３，７００円 内訳 ・寄付　５０３，７００円 ・会費　０円 ・助成金　０円

本事業を進める中で、資金調達として工夫したのは、金銭的な寄付だけでなく、食材やお菓子などの寄付やフードバンクからの食材提供といった当会の既存のパートナーからの協力を得たことである。また、地元のライオンズクラブからリフレッシュプラグラムの協力要請を受け、運営協力することで当初の計画よりも多くリフレッシュプログラムを開催できた。さらに、ドローンや農機具を使った農作業体験など、地域の企業や農家といった幅広い協力により、子どもの視野を広めることができた。

２）　活動とアウトプットの実績

（１）主な活動

①. 子どもの居場所の設置と運営

毎週あるいは毎月２－３度の開催を計画していたが、表で示されるように空白ーコロナ禍により活動を休止せざるを得なかった時もあった。主に中学生を対象とした学習支援を中心とする居場所は、バーチャル（オンライン）とリアル（対面）を併用し、特に初年度はバーチャルが併用されたからこそ活動を実施できた。

開催場所については、コロナ感染予防やワクチン接種会場になるなど、移動せざるを得ず、実施場所は３年間で１０か所を超え、場所の確保に奔走する３年間でもあった。

① －１．バーチャル：学習支援オンライン自習室、オンライン昼食会（中・高生）

本事業の計画時、コロナの感染拡大により全国一斉休校、終息の見通しも全く見えない状況で、避難所において中学生やその保護者から聞かれた学習の不安にこたえること、さらに、中高生の居場所という位置づけでもある。保護者が仕事などで昼食は一人でとる子どももいると把握していたので、昼食のお弁当を配布し、対面では不可能でもバーチャル上では一緒に昼食をとる機会を提供した。

コロナ禍状況によっては、対面でも開催し、バーチャルよりも参加者が多く、ほぼ全員がリピーターとなっていた。２年目には中学校の放課後学習支援に協力し、３年目を継続予定であったが、コロナ禍により中止となった。

① －２　週末の子どもの居場所（以下ふるさと）（対象：幼児・小学生）

台風１９号災害時、長野市の設置した避難所の一つ北部スポーツ・レクリエーションパーク避難所で、毎日「子どもの居場所」を開催し、避難所閉鎖後には「週末の子どもの居場所」を継続してきた。子どもが安全に安心して遊び、いられる場所でもあり、被災後の生活再建のため奔走する保護者が安心して子どもを預けられる場所でもあった。本活動はその週末の居場所を継続し、コロナ禍により活動休止、保護者の判断による不参加もあったが、保護者が安心して子どもを預けられる、子どもが安心して安全にいられる場所として可能な限り開催を続けた。

① －３　子どもの居場所 in 権堂（以下権堂）（対象：幼児・小・中・高生）

長野市中心部に位置する「長野市権堂イーストプラザ 市民交流センター」で、毎月３回（第１・第３火曜日、第２金曜日）、幼児から高校生までを対象に開催。宿題をする子ども、年齢層が幅広いがゆえに幼児や小学生が中高生のお兄さんお姉さんやボランティアと鬼ごっこなど外遊び、手芸や工作・クイズなどボランティアやスタッフの企画を楽しむ幅広い活動。幼時から人生の大先輩まで多年齢の人々が集う。

手作りの夕飯は、本事業期間はコロナ感染予防対策として黙食を徹底した。また、活

動休止中はお弁当あるいは食材提供を行った。

① －４　豊野学習支援（中・高生）

当初の計画にはなかったが、３年目に豊野地区[1]の不登校の子どもの保護者の会より相談を受け、不登校の子どもの学習室を２０２２年１０月より週に１度、豊野公民館で開催した。学習だけではなく、子どもたちは他の参加者と会話や遊びを楽しみ、全員がリピーターとなっている。１－１の学習支援と違い、学習会に子どもと一緒に参加する保護者もおり、スタッフに不安や心配を相談が多く、別途保護者の会（３－４）を設けた。

② ．子どものリフレッシュプログラム

②－１　ユースキャンプ

令和２年度は日帰りと一泊それぞれ１回ずつ計２回、令和３年度は日帰り２回と一泊１回の計３回、令和５年度は日帰り１回（２回準備したが１回は開催直前にはコロナ禍により中止）と一泊１回の計２回、長野市ライオンズクラブの寄付などもあり本事業計画時よりも多く開催できた。

善光寺宿坊に宿泊する冬のリフレッシュプログラム「ウィンターキャンプ」は、週末の子どもの居場所には来なくなる高学年で、６年生には修学旅行があることから小学５年生を主対象とした。長沼小学校の助言を得て、コロナ対策のため、本活動は長沼小学校児童のみを対象とした。初回の令和２年度は、長沼小学校５年生全員が参加した。２年目は９割、３年目になると半分くらいで受け入れ人数に余裕があったため４年生も対象とした。

春は、ボッチャやフットサルのスポーツをする「春のリフレッシュプログラム」、夏は長野市の多様な取り組みを学び体験し、野外活動を楽しむ日帰りの「サマーキャンプ」を開催した。

②－２　復興イベント

長野市の主催する復興イベント「長野市復興祈念事業～いまこそ応援「がんばろうNAGANO」」２０２０年と２０２１年に、居場所に参加している子どもたちで復興缶バッジを制作し参加した。２０２０年度は、子どもたちから思いのこもった原画を募集し、入賞４作品の原画を先輩の若者グループに届けイラストを依頼し、そのイラストで缶バッジを制作し、長野市復興記念事業「今こそ応援『がんばろうNAGANO』２０２０」、「同２０２１」の主催長野市に届け、参加した方たちに配られた。２０２０年度は１６００個作り、「被災地を応援ドライブスルー物産展復幸BOX」４種類に８００個、「被災地をめぐるデジタルスタンプラリー記念品」として４００個、「ながの子ども・子育てフェ

[1] ２年目に放課後学習支援に協力した中学校のある地域

スティバル参加記念品」として４００個で配布された。２０２１年度は被災地の飲食店で配布した記念缶バッジ１０００個のうち、５００個の缶バッジを子どもたちと作った。コロナ禍により、子どもたちと一緒に参加することは、本事業としては行わなかった。

	令和２年度	令和３年度	令和４年度
ユースキャンプ	１２月：ウィンターキャンプ in 善光寺（一泊二日、小学５年生１８名） ３月：春のリフレッシュプログラム「ボッチャ」（対象：小学生、２５名参加）	７月：DAY キャンプ in 飯綱（対象小学生、１９名） １２月：ウィンターキャンプ in 善光寺（一泊二日、対象：小学５年生、１５名参加） ３月：春のリフレッシュプログラム「フットサル」（対象：小学生、１８名参加）	７月：DAY キャンプ with ライオンズ（対象小学生、１７名） 中止７月:DAY キャンプ in 飯綱（対象小学生、２８名参加申し込み） １２月：ウィンターキャンプ in 善光寺（一泊二日、対象:小学４－５年生、１０名）
復興イベント	缶バッジ制作（長野市復興祈念事業～いまこそ応援「がんばろう NAGANO」２０２０～）	缶バッジ制作（長野市復興祈念事業～いまこそ応援「がんばろう NAGANO」２０２１～）	開催なし

③. 子育て中の保護者の居場所の運営と傾聴活動

保護者がくつろげる場を設けようと保護者の居場所を計画したが、事業を開始した２０２０年６－７月の２か月、利用者は０が続いた。他方、子どもの居場所やリフレッシュプログラムの送迎など子どもの活動の「ついで」に、スタッフに話したり相談したりする保護者が毎回いることから、保護者の居場所として独立させ別日に開催するのではなく、子どもの居場所などで保護者が話していけるようコーヒーやお茶を用意し、保護者が話しやすい場を提供した。中学生の保護者からは思春期の子どもへの接し方や反抗期について、小学生の保護者からは家庭での子どもの状況や家庭内の相談あるいは会話があった。コロナ禍もあり、子ども支援の取り組みでは難しい相談には、当団体の他事業や児童相談所、行政を紹介するなど、相談は多岐かつ深刻なケースもでてきた。

３年目の後半には、不登校の保護者の会から相談を受け、不登校の子どもたちを対象とする学習支援を２０２２年１０月より開始した。この支援では、学習時間に参加する保護者もおり、毎回相談や悩みを打ち明ける保護者がいたこと、保護者会と相談し専門家に話を聞き質問できる機会を月に１度保護者の会として設けることとした。

③－１　バーチャル、③－２　長沼コミュニティセンター、③－３　古里児童センター

事業を開始した２０２０年６月７月とオンラインと長沼コミュニティセンターに保護者の居場所としてパパママサロンを開催したが、参加者は０であった。他方、週末の子どもの居場所や学習支援に参加する子どもの送迎時に、スタッフに話していく・相談する保護者が後を絶たず、子どもの居場所と並行して開催。子育て中の保護者に取り、自分だけで出かけることは難しく、子どもの活動の「ついで」というスタイルが利用しやすいと判断された。

③－４　豊野学習支援保護者の会

豊野地区の「不登校・行き渋り親の会」から依頼を受け、不登校の小中学生を対象にした平日の学習支援を開始した。最終年の２０２２年１０月から毎月２回（月曜日）の開催にしている。学習会に参加する子どもの送迎だけでなく、学習会に参加する保護者もおり、スタッフに悩みを打ち明けることや専門家から不登校や不登校の子どもとの接し方などを学びたいという声もあがった。そこで、１１月より月に１度、子育てやこころ・からだ・性について長野市で相談を受ける「川中島の保健室[2]」の主催者を招聘し、不登校の子どもについて学び、保護者の悩みや相談を受ける機会を設けた。要望は高かったが、残念ながらコロナ感染拡大により２０２３年１月に中止となった。

[2] 長野県公立小・中学校の養護教諭を４０年勤め、退職後、長野市の自宅に“川中島の保健室”を開室。子育てやこころ・からだ・性にまつわる相談と講演や出前授業に取り組まれている。『まちかど保健室にようこそ からだ・こころ・性のこと　なんでも話してホッとできる“川中島の保健室”ものがたり』より。ホームページ：http://www.川中島の保健室.jp/

活動一覧　２０２０年度

台風19号による被害を受けた子どもとその保護者への支援事業　令和２年度（６月ー３月）

				R2	R2	R2	R2	R2	R2	R2	R2	R2	R2
				６月	７月	８月	９月	１０月	１１月	１２月	１月	２月	３月
子どもの居場所	子どもの居場所（小学生）	in 古里	古里公民館						1回/7名		3回/15名	3回/24名	2回/11名
			赤沼公会堂										
		in 新田町	権堂イーストプラザ	2回/16名	3回/26名	3回/27名	3回/33名	3回/27名	3回/37名	3回/42名	3回/38名（持ち帰り弁当）	3回/48名（持ち帰り弁当）	3回/43名（持ち帰り弁当）
	学習支援（中学生）	子どもの居場所@バーチャル/公民館自習室	オンライン	4回/7名、13個	3回/3名、3個	5回/4名	4回/3名	4回/6名	4回/3名	4回/3名	4回/4名	4回/2名	4回/2名
			豊野公民館			5回/0名			4回/14名	4回/4名	4回/4名	4回/2名	3回/0名
			古里公民館			5回/2名	4回/4名	4回/6名	4回/11名	4回/11名	4回/8名	4回/8名	4回/9名
			かがやきひろば東北										
			長沼住民交流ハウス										
		豊野学習支援	豊野公民館										
リフレッシュプログラム									復興イベント「NAGANOいまこそ応援2020」	ウインターキャンプin善光寺			春のリフレッシュプログラム
子育て中の保護者の居場所の運営と傾聴活動		長沼コミュニティセンター		開催したが参加者がなく保護者の居場所中止。子どもの居場所と並行して開催へ		子どもの居場所開催に準じ開催（2023年3月事業終了まで）							
		オンライン				—	—	—	—	—	—	—	—
その他													スタッフ研修会 災害時における円滑な子ど
コロナ関連 太字斜め：中止 太字：食事中止（弁当配布）				感染警戒レベル1	感染警戒レベル1（-7/28） 感染警戒レベル2（7/29-）	感染警戒レベル2（-8/24） 新型コロナウイルス警報/感染警戒レベル3（8/25-）	新型コロナウイルス警報/感染警戒レベル3（-9/9） 新型コロナウイルス注意報/感染警戒レベル2（9/10-15） 感染警戒レベル1（9/16-）	感染警戒レベル1	感染警戒レベル1（-11/7） 新型コロナウイルス注意報/感染警戒レベル2（11/8-11） 新型コロナウイルス警報/感染警戒レベル3（11/12-13） **新型コロナウイルス特別警報/感染警戒レベル4（11/14-）**	**新型コロナウイルス特別警報/感染警戒レベル4（-12/3）** 新型コロナウイルス警報/感染警戒レベル3（12/4-）	新型コロナウイルス警報/感染警戒レベル3 **医療警報（1/8-13）** **長野県緊急事態宣言（1/8-）** **医療非常事態宣言（1/14-）**	**医療非常事態宣言（-2/2）** 新型コロナウイルス警報/感染警戒レベル3（-2/11） 新型コロナウイルス注意報/感染警戒レベル2（2/12-15） 感染警戒レベル1（2/16-）	感染警戒レベル1（-3/10） 新型コロナウイルス注意報/感染警戒レベル2（3/11-14） 新型コロナウイルス警報/感染警戒レベル3（3/15-17） **新型コロナウイルス特別警報I/感染警戒レベル4（3/18-28）** **新型コロナウイルス特別警報II/感染警戒レベル**

活動一覧　２０２１年度

台風19号による被害を受けた子どもとその保護者への支援事業　令和年4度

				R3	R3	R3	R3	R3	R3	R3	R3	R3	R3	R3	R3
				4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
子どもの居場所	子どもの居場所（小学生）	in 古里	古里公民館		2回/4名	3回/21名	3回/33名	1回/3名	1回/0名	3回/8名		2回/15名			
			赤沼公会堂								3回/25名				1回/6名
		in 新田町	権堂イーストプラザ		3回/45名	3回/48名	3回/57名	1回/13名	3回/26名	3回/49名	3回/69名	3回/79名	1回/27名	2回/68名	3回/88名
	学習支援（中学生）	子どもの居場所@バーチャル/公民館自習室	オンライン	2回/2名	5回/3名	4回/5名	5回/5名	1回/0名	3回/0名	5回/0名	4回/0名	4回/0名	5回/7名	16回/46名	7回/17名
			豊野公民館												
			古里公民館	2回/5名	5回/20名	4回/23名	5回/20名	1回/4名	3回/17名	1回/4名	4回/32名				3回/11名
			かがやきひろば東北							4回/27名		4回/35名	2回/13名		
			長沼住民交流ハウス												
		豊野学習支援	豊野公民館												
リフレッシュプログラム					**中止**：DAYキャンプin鬼無里		DAYキャンプin飯綱			復興イベント「NAGANOいまこそ応援2021」		ウインターキャンプin善光寺			春のリフレッシュプログラム
子育て中の保護者の居場所の運営と傾聴活動		子どもの居場所開催に準じ開催													
		オンライン		―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―
その他						災害時における円滑な子ども支援のためのネットワーク学習会				災害時における円滑な子ども支援のためのネットワーク交流会		フードパントリー 災害時における円滑な子ど	フードパントリー	フードパントリー 災害時における円滑な子ど	
コロナ関連 太字斜め：中止 太字：食事中止（弁当配布）				**感染警戒レベル5（-4/15） 新型コロナウイルス特別警報II（-4/21） 全県医療警報（4/8-6/8） 新型コロナウイルス特別警報I（4/22-）**	**全県医療警報（4/8-6/8） 全県警戒レベル4（5/21-6/4）**	**全県警戒レベル4/特別警報I（-6/4）** 全県警戒レベル3/警報（6/5-） **全県医療警報（4/8-6/8）**	感染警戒レベル2（7/9-29） 感染警戒レベル3（7/30-7/31）	**特別警報I/感染警戒レベル4（8/1-15） 全県医療警報（8/6-9/14） 特別警報II/感染警戒レベル5（8/16-9/12） 全県医療非常事態（8/20-9/12）**	**医療警報（9/13-） 特別警報I/感染警戒レベル4（9/13-9/29）** 警報（9/30-）	感染警戒レベル2（-10/19） 感染警戒レベル1（10/20-1/4）	感染警戒レベル1	感染警戒レベル1	新型コロナウイルス注意報/感染警戒レベル2（1/5） 新型コロナウイルス警報/感染警戒レベル3（1/6-10） **新型コロナウイルス特別警報I/感染警戒レベル4（1/10-13） 新型コロナウイルス特別警報II/感染警戒レベル5（1/14-26） まん延防止等重点措置（1/27-）**	**まん延防止等重点**	**まん延防止等重点措置（-3/6） 新型コロナウイルス特別警報II/感染警戒レベル5（3/7-）**

活動一覧　２０２２年度

支援事業　令和４年度（令和５年２月実施まで記載）

R4 ４月	R4 ５月	R4 ６月	R4 ７月	R4 ８月	R4 ９月	R4 １０月	R4 １１月	R4 １２月	R4 １月	R4 ２月	R4 ３月
2回／13名	2回／20名	2回／16名		1回／5名		1回／3名					
1回／11名			1回／4名	1回／4名	1回／2名		2回／6名	2回／28名	*12月最終日はさらに保護者10名も参加したクリスマス会		
3回／48名	3回／45名	3回／52名	3回／31名	3回／40名	3回／50名	3回／54名	3回／37名	3回／25名	3回／名	3回／名	
5回／0名	4回／0名	4回／0名	4回／0名	2回／0名	4回／0名	5回／0名	4回／0名	4回／0名	4回／0名	4回／0名	
5回／0名	4回／9名	4回／11名	5回／12名	2回／3名	4回／12名	5回／22名	4回／28名	3回／16名	4回／23名	4回／14名	
5回／25名	4回／28名	4回／32名	5回／18名	3回／10名	4回／20名	5回／11名	4回／19名	4回／19名	4回／20名	4回／17名	
			4回／18名	4回／10名	4回／20名	4回／11名	4回／18名	4回／19名			
	4回／0名	4回／2名									
						2回／5名（+保護者3名）	2回／7名（+保護者2名）	2回／3名（+保護者1名）			
			DAYキャンプwライオンズ **中止**：DAYキャンプin飯					ウインターキャンプin善光寺			
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	災害時における円滑な子ども支援のためのネットワーク交流会	災害時における円滑な子ども支援のためのネットワーク学習会	災害時における円滑な子ども支援のためのネットワーク定例会		災害時における円滑な子ども支援のためのネットワーク交流会・定例		スタッフ研修会		スタッフ研修会 災害時における円滑な子ど	「緊急時における子ども支援ネットワーク」設立	
医療警報（4/20−）新型コロナウイルス特別警報II/感染警戒レベル5	**医療警報（−5/23）新型コロナウイルス特別警報II/感染警戒レベル5（−5/23）** 感染警戒レベル3（5/24−6/8）	感染警戒レベル3（−6/8） 感染警戒レベル2（6/9−23） 感染機械レベル1（6/24−）	感染警戒レベル1（−7/4） 感染警戒レベル2（7/5−6） 感染警戒レベル3（7/7−20） **医療警報（7/20−27）** **感染警戒レベル4（7/20−27）** **医療特別警報（7/28−8/7）** **感染警戒レベル5（7/28−8/7）**	**医療特別警報（−8/7）** **感染警戒レベル5（−8/7）** **医療非常事態宣言（8/8−24）** **感染警戒レベル6（8/8−）** **BA.5対策強化宣言（8/24−9/12）**	**BA.5対策強化宣言（−9/12）** **医療特別警報（9/13−21）** **医療警報（9/22−10/3）** **感染警戒レベル4（9/22−10/3）** 感染警戒レベル3（10/3−）	**医療警報（−10/3）** **感染警戒レベル4（−10/3）** 感染警戒レベル3（10/4−19） **医療警報（10/20−）** **感染警戒レベル4（10/20−27）** 感染警戒レベル3（10/28−31）	**感染警戒レベル4（11/1−3）** **医療特別警報（11/4−13）** **感染警戒レベル5（11/4−1/23）** **医療非常事態宣言（11/14−1/31）**	**感染警戒レベル5** **医療非常事態宣言**	**感染警戒レベル5（−1/23）** **感染警戒レベル4（1/24−30）** **医療非常事態宣言（−1/30）** **医療特別警報（1/31−）** 感染警戒レベル3（1/31−）	**医療特別警報（−2/9）** 感染警戒レベル3（−2/15） 小康期（2/16−）	

（２）アウトプットの実績

短期アウトプット	指標	初期値/初期状態	目標値／目標状態	目標達成時期	実績値
１－１ 子どもの居場所の設置と運営 バーチャル:オンライン自習室､オンライン昼食会(中高生)､公民館自習室	１. 参加する子どもへのアンケートにより、満足度・充実度・楽しみ度をはかる ２. ユース･ボランティア(高校生）へのアンケートにより、満足度・充実度・楽しみ度をはかる	参加する子どもへのアンケートにより､①平日の学習時間､②平日の昼食を誰と食べているか、③学習の集中度等､コロナ禍により休校中の平日の様子を調査（アンケート）する。	１．５割以上 ２．５割以上	２０２３年３月	１. 満足度は３年間を通じて子ども保護者共に９割以上である。２回以上参加する率は１００%で､想定した水準以上に達成。 ２．― （２年目以降、週末の子どもの居場所に大学生参加したがアンケート実施せず）
１－２ 子どもの居場所の設置と運営 週末の子どもの居場所（幼児小学生）	１．保護者へのアンケート ２．子どもが食べる昼食量 ３．スタッフの観察	・保護者へのヒアリングにより､参加することで参加前と変化がみられるか､どのような変化かを調査する。 ・参加する子どもの様子を観察し､様子の変化を調査する。	１．５割以上 ２．子どもが食べる昼食量 ・食べられる量をスタッフに伝えられるようになり､残す量がほとんどない ３．スタッフの観察 ・笑顔や真剣な様子など､周囲への遠慮や疲労がほとんど見られなくなる	２０２３年３月	１．３年目の令和４年６月の保護者アンケートで､満足が１００%｡想定した水準以上に達成。 ２. コロナ禍により昼食提供は持ち帰り弁当を配布に変更｡食べられた量は完食とほぼ完食で６割であり達成。 ３．スタッフインタビューで､「１年目は生活再建のため保護者の理由だったが、徐々に子どもの行きたいという意思によって参加している」という発言があり､預けられる場所から楽しみの

					場所になっている。
１－３　子どもの居場所の設置と運営 学習支援（幼・小・中・高生）	１．保護者や参加する子どもへのアンケートにより、満足度・充実度・楽しみ度をはかる ２．ユース・ボランティア（大学生）へのアンケートにより、満足度・充実度・楽しみ度をはかる	・保護者へのヒアリングにより、参加することで参加前と変化がみられるか、どのような変化かを調査する。 ・参加する子どもの様子を観察し、様子の変化を調査する。 小学生以上の子どもへのアンケートにより、①普段の学習時間、②普段の学習時の集中度等、普段の学習の様子を調査（アンケート）する。	１　５割以上 ２　５割以上	２０２３年３月	１．満足度は子ども、保護者共にほぼ１００％と非常に高い。 ２．ユースボランティアのアンケートなし。活動視察と簡単なヒアリングで、工作やクイズなど企画を考え、子どもたちと楽しんでいること、宿題に気乗りしない子どもを励ましやり切った子どもの嬉しそうな様子から、子どもとユースボランティアの良好な関係が構築されている。
１－４　子どもの居場所の設置と運営 学習支援（中高生）	１．参加する子どもへのアンケートにより、満足度・充実度・楽しみ度をはかる ２．ユース・ボ２．ランティア（大学生）へのアンケートにより、満足度・充実度・楽しみ度をはかる	参加する子どもへのアンケートにより、①普段の学習時間、②普段の学習時の集中度等、普段の学習の様子を調査（アンケート）する。	１　５割以上 ２　５割以上	２０２３年３月	評価なし。 コロナ禍により開始２ヶ月後には開催中止となり、実施期間が短かいため。 継続希望の声があること、保護者の相談会の開催など、本活動に対する参加者の満足は高いと推察しうる。
２－１　子どものリフレッシュプログラム	１．参加する子どもへの事前終了アンケートにより、満足度・充実度・楽しみ度をはか	参加する子どもへの事前アンケート（申込時に回収）により、夏休みから冬休みにか	１．５割以上 ２．過半数の＋評価	２０２３年３月	１．合計７回開催し、どの会のアンケートでも、子ども、保護者ともに満足度はほぼ

ユースキャンプ 夏・冬・春	る ・子ども用アンケートの３−１で「満足している」「ほぼ満足している」と回答した人の割合 ２．ボランティアやスタッフの観察 ・ボランティアやスタッフが参加者に寄り添い、適切な対応をしている。	けての期間の①家族旅行や課外活動など非日常の時間を過ごしたかどうか、②自然体験の有無、③チームで取り組む活動の有無を調査する。			１００％と非常に高い。子どもは楽しかったという記述が多く、保護者は子どもが充実した時間を過ごし満足して帰ってきたという記述が目立ち、達成率は非常に高い。 ２．アンケートがなく、定量評価なし。 参加した学生のコメントに、子どものサポートしながら自身の楽しみや学びになったとあり、また、子どものアンケート記述に大学生がよかったとあり過半数の＋評価は達成と判断しうる。
２－２　子どものリフレッシュプログラム 復興イベント	１．参加する子どもへの終了後アンケートにより、満足度・充実度・楽しみ度をはかる ・子ども用アンケートの３−１で「満足している」「ほぼ満足している」と回答した人の割合 ２．ボランティアやスタッフ	ボランティアやスタッフの観察 （参加の準備等の様子など）	１．５割以上 ２．過半数の＋評価 ３．５割以上	２０２３年３月	評価なし。 コロナ禍により復興イベントには、缶バッジの提供にとどまった。なお、２０２２年度は中止となった。 子どもたちから缶バッジのデザインを募集し、バッジの制作は外部に委託。

	の観察 ・ボランティアやスタッフが参加者に寄り添い、適切な対応をしている。 ３．子どもたちの企画への参加度 ・本事業のイベント運営等への子どもたちの参加率				
３－１　子育て中の保護者の居場所の運営と傾聴活動 バーチャル	１．参加する保護者へのアンケートにより、満足度・充実度をはかる ・保護者用アンケートの４−１で「満足している」「ほぼ満足している」と回答した人の割合 ２．ボランティアやスタッフの観察 ・ボランティアやスタッフが参加者に寄り添い、適切な対応をしている。	参加する保護者への事前アンケートにより、①不安を話せる場の有無、②不安を話す相手、③誰と話したいか、④何を聞きたいか・話したいかなどを把握する。	１．５割以上 ２．過半数の＋評価	２０２３年３月	評価なし ２０２０年６月７月と開催したが、参加する保護者が０。子どもの居場所やリフレッシュプログラムに参加する子どもの送迎時にスタッフと話したり、相談したりすることはよくあり、保護者だけが参加する活動は難しく、こどもの参加の「ついで」のような形で取り組んだ。 スタッフインタビューにより、活動を重ねるにしたがって保護者に気持ちの余裕が見られるようになったこと、「落ち着いてきたなあ」と感
３－２　子育て中の保護者の居場所の運営と傾聴活動	１．参加する保護者へのアンケートにより、満足度・充実度をはかる ・大人用アンケートの４−１	参加する保護者への事前アンケートにより、①不安を話せる場の有無、②不安を話す相手、③誰と話したいか、④	１．５割以上 ２．過半数の＋評価	２０２３年３月	

長沼コミュニティセンター	で「満足している」「ほぼ満足している」と回答した人の割合 ２．ボランティアやスタッフの観察 ・ボランティアやスタッフが参加者に寄り添い、適切な対応をしている。	何を聞きたいか・話したいかなどを把握する。			じたという発言が複数聞かれた。また、３年目になると、「お母さんたちがきれいになった、きちんとお化粧して余裕が出てきた」との発言などから、保護者が被災から立ち直りつつあり、日常を取り戻してきていると判断する。 他方、３年目の本事業の他活動のアンケートの自由記述に、子どもが被災から立ち直ったとまで言い切れず、事業が終了することへの不安もあり、保護者自身もまた立ち直ったと言い切れないことの表れとも考えられる。 こどもの城は、他事業や新規事業をこれまで通り長野市で続けていくことを保護者に伝え、いつでも連絡や訪問を待っていると伝えている。
３－３　子育て中の保護者の居場所の運営と傾聴活動 古里児童センター	１．参加する保護者へのアンケートにより、満足度・充実度をはかる ・大人用アンケートの４−１で「満足している」「ほぼ満足している」と回答した人の割合 ２．ボランティアやスタッフの観察 ・ボランティアやスタッフが参加者に寄り添い、適切な対応をしている。	参加する保護者への事前アンケートにより、①不安を話せる場の有無、②不安を話す相手、③誰と話したいか、④何を聞きたいか・話したいかなどを把握する。	１．５割以上 ２．過半数の＋評価	２０２３年３月	

活動参加数

子どもの居場所

	ふるさと（週末）		権堂（平日）	
	開催数	参加者数	開催数	参加者数
2020	21	125	29	375
2021	20	115	28	569
2022	15	111	30	391

子どもの居場所（学習支援）

	バーチャル・対面		平日放課後		豊野中学校放課後		不登校の子ども	
	開催数	参加者数	開催数	参加者数	開催数	参加者数	開催数	参加者数
2020	40	124	29	331	—	—	—	—
2021	58	283	40＊	43	8	143	—	—
2022	48	333	—	—	—	—	14	24

＊うち、１４回は参加者０

リフレッシュプログラム

	ウィンターキャンプ	サマーキャンプ	春のリフレッシュ
2020	18	—	25
2021	15	19	18
2022	11	17	—

３）　外部との連携の実績

広報実績

全体

	令和２年度	令和３年度	令和４年度
活動広報	法人ホームページに、本事業のページを設置し、事業予定や開催状況を毎回掲示し、参加募集を含め広く周知している。		
パンフレット「災害支援事業のご案内」	―	・２０００枚作成 ・災害ボランティア委員会、教育委員会、長沼小学校に配布	―

子どもの居場所の設置と運営

	令和２年度	令和３年度	令和４年度

学習支援（バーチャル／公民館自習室）	・チラシ配布：合計３，４００枚 ①中学校２校で学校を通して全校生徒を対象に３回 ②長野市社会福祉協議会と公民館２ヵ所と支所１か所でチラシ設置	・チラシ配布：合計１７１４枚 ①対象中学校２校で学校を通して全校生徒に配布（４月） ②長沼市社協、公民館２ヵ所、支所１か所、公共施設１か所にチラシ設置 ③長沼地区全７３２戸に配布（回覧板？） ④対象中学校の１校に春休み前に学校を通して全校生徒に配布	・チラシ配布：合計９３０枚配布 ①対象中学校２校で学校を通して全校生徒に配布、長沼小学校で小５・６を対象に学校を通して配布（４月） ②公民館２ヵ所、支所１か所にチラシ設置
週末の子どもの居場所（あそびの広場ふるさと）	・チラシ配布：合計４９０枚 ①長沼小学校で学校を通して全児童に２回配布 ②鍋屋田小、長野市社協、スポコミ東北、公立保育園３か所でチラシ設置	・チラシ配布：合計９１２枚 ①長沼小学校と長沼保育園で学校・保育園を通して全児童・園児に配布 ②長野市社協チラシ設置 ③長沼地区全７３２戸に配布（回覧板？）	チラシ配布：合計１００枚 長沼小学校で学校を通して全児童に配布
平日の子どもの居場所（ながのこどもわくわくカフェ）	ー （継続利用の子どもがおり、コロナ禍のため広報せず）	ー （継続利用の子どもがおり、コロナ禍のため広報せず）	チラシ配布：合計１１８０枚 ①４小学校で学校を通して全児童に配布（計１０００枚） ②３中学校、公共施設３か所（うち２ヵ所は事業開催会場）でチラシ設置（各３０枚）

子どものリフレッシュプログラム

	令和２年度	令和３年度	令和４年度

長野市復興イベント	・チラシ配布：合計１５０枚 ①缶バッヂ原画募集チラシを長沼小学校で、学校を通して全校に１回配布 ・スポコミ東北にチラシ設置	ー （特になし）	ー （長野市復興イベント開催されず）
初夏のリフレッシュプログラム	ー （計画なし）	・長沼小４・５・６年生に学校を通してチラシ配布（計５０枚） ・日本テレビ８/２８放送の２４時間テレビで全国放送	・チラシ配布：合計９３０枚配布 長沼小に加え他５小学校で学校を通して全児童にチラシ配布（計７５０枚） 篠ノ井地区でチラシ設置（計８０枚） ・＜中止＞飯綱でDAYキャンプ 長沼小３－６年生に学校を通してチラシ配布（８０枚）
冬のリフレッシュプログラム	・対象となる長沼小学校で１回、全校生徒を対象に学校を通して配布（合計１００枚）	・長沼小５・６年生に学校を通してチラシ配布（計５０枚）	
春のリフレッシュプログラム	・対象となる長沼小学校で２回、全校生徒を対象に学校を通して配布（合計２００枚）	・長沼小全児童に学校を通してチラシ配布（計９０枚）	ー （計画なし）

子育て中の保護者の居場所プログラム

	令和２年度	令和３年度	令和４年度
保護者の居場所	・チラシ設置 長野市社会福祉協議会、長沼支所で合計１００枚	ー （保護者だけを対象とする活動から子どもの活動のパラレルに変更のため広報な	ー （保護者だけを対象とする活動から子どもの活動のパラレルに変更のため広報な

		し）	し）

メディア掲載

【子どもの居場所】

・週刊長野（７月４日号にコラム掲載）

・長野県社会福祉協議会発行の「やまびこ通信（３月号)」に取材記事が掲載

【リフレッシュプログラム】

・「飯綱で DAY キャンプ」が、日本テレビ 8/28 放送の 24 時間テレビで全国放送

連携・対話実績

【連携】

長野市子ども未来部と復興局

長野市教育委員会

長沼小学校

緊急支援の主対象となった子どもの通う小学校で、本事業の子どもの居場所（週末の子どもの居場所)やリフレッシュプログラム、保護者支援の主対象。コロナ禍でもあり、子どもたちの様子や活動の内容など折に触れて訪問し、相談や活動報告を行った。長沼小は全児童９０名程度と規模の小さい学校で、コロナ禍がなければ全児童が一緒になる全学年活動もあり、何より教員と児童の関係が大変良好で近い。特に、教頭は令和元年には６年生の担任で、２０２０年度より教頭として全児童をよく知る。コロナ本事業開始後、半年ほどたった時に児童の様子など教員アンケートに協力。保護者アンケートの実施や活動への参加募集のチラシ配布など広報協力もあった。

豊野中学校・東北中学校

子どもの居場所（学習支援）の主対象となる子どもの通う中学校。東北中学校は長沼小の子どもの通う中学校で、豊野中学校は豊野地区という台風で甚大な被害を受けた地域にある。学習支援の参加募集のチラシ配布、子どもの様子など相談や報告を行った。特に豊野中学校は、中学校で開催されていた放課後学習支援の終了後を引き継ぐ形で、２年目の令和３年度に本事業の中で、平日に豊野中学校放課後学習支援に取り組み、令和４年度も実施予定であったがコロナ禍によりできなかった。

長野 NPO センター

中学生と主対象とする学習支援の経験がこどもの城にはなかったため、令和２年度の学習支援を長野 NPO センターに運営を委託し、同時にノウハウを学んだ。令和３・４年度はこどもの城が運営し、中学校での放課後学習室や不登校の子どもの平日学習支援へと活動の場を広げることができた。

以下に、活動ごとの連携先一覧を掲載する。

子どもの居場所

活動	年度	連携団体名	備考
ふるさと	R２−４	長沼小学校	企画周知
ふるさと	R２	古里児童センター	会場提供
ふるさと	R２−４	古里公民館	会場提供
ふるさと	R２−４	ばあばこびれ	弁当手配
ふるさと	R２	ボランティア	１名
ふるさと	R３−４	赤沼区公会堂	会場提供
ふるさと	R３	IT 専門家	２名、プログラミング体験
ふるさと	R３−４	ドンキホーテ	弁当手配
ふるさと	R３	ボランティア	４名、居場所支援
ふるさと	R３	大学生スタッフ	１名
ふるさと	R４	IT 専門家	１名、プログラミング体験
ふるさと	R４	ボランティア	居場所支援（企画）、２代目長野住みます芸人ゆでたかの[3]
ふるさと	R４	大学生スタッフ	２名、居場所支援（企画）
学習支援	R２−４	ソフトバンク	タブレット契約・モラル講座
学習支援	R２−４	ドコモ	タブレット契約
学習支援	R２−４	東北中学校	企画周知
学習支援	R２−４	豊野中学校	企画周知
学習支援	R２−４	古里公民館	会場提供
学習支援	R２	長野県 NPO センター	１１名 事業委託（学習支援・居場所支援）
学習支援	R２	学生ボランティア	１１名、学習支援・居場所支援
学習支援	R３−４	豊野公民館	会場提供
学習支援	R３	長沼地区住民交流ハウス	会場提供・企画周知
学習支援	R３	長野県 NPO センター	２名、イベント企画
学習支援	R３	学習支援スタッフ	１１名、学習支援・居場所支援・イベント企画（ゆでたかの、学生６名含む）
学習支援	R３	学生ボランティア	１名、学習支援・居場所支援
学習支援	R３−４	ドンキホーテ	弁当手配
学習支援	R４	学習支援スタッフ	７名、学習支援・居場所支援・イベント企画（ゆでたかの、学生３名含む）
権堂	R２−４	こどもの城他事業	子育てサロンぴーかーぶー
権堂	R２−４	川中島の保健室[4]	てぃーんずカフェ

[3] 長野市で寺子屋運営（https://nagano-citypromotion.com/nagalab/people/people12306/）
[4] http://www.川中島の保健室.jp/

権堂	R2-4	権堂イーストプラザ	会場提供
権堂	R2	長野県 NPO センター	８名、事業委託（学習支援・居場所支援）
権堂	R2-4	フードバンク信州	食材支援
権堂	R2-4	長野地域こどもカフェプラットフォーム	食材支援
権堂	R2-4	JA ながの	食材支援
権堂	R2-4	長野県栄養士会	食事支援（栄養士）、夕食の献立作りと調理
権堂	R2	ボランティア	２２名、学習支援・居場所支援
権堂	R3	学習支援スタッフ	５名、学習支援・居場所支援
権堂	R4	本願寺長野別院	会場提供
権堂	R4	学習支援スタッフ	４名、支援・居場所支援

リフレッシュプログラム

ウィンター	R2-4	長沼小学校	企画相談、周知
ウィンター	R2-4	兄部坊	宿泊受け入れ、善光寺宿坊
ウィンター	R2-4	ホテル信濃路	ランチ受け入れ
ウィンター	R2-4	アリーナ	バス手配
ウィンター	R2-4	信州アウトドアプロジェクト	２名、野外レクリエーション・経過観察
ウィンター	R2-4	長野県 NPO センター	２名、SDGs ワークショップ
ウィンター	R2-4	長野県立大学地域貢献サークル「ぐるんぱ」	グループ担当 R2-3：４名、R4：５名
ウィンター	R2	運営サポートスタッフ	１名、こどもカフェ学習支援スタッフ
ウィンター	R4	学生スタッフ	２名、グループ担当、大学院生（ぐるんぱ卒業生）
サマー	R3	長沼小学校	企画相談、周知
サマー	R3	アリーナ	バス手配
サマー	R3	飯綱高原よっこらしょ	１０名程度、企画・運営・昼食手配
サマー	R3	長野県立大学地域貢献サークル「ぐるんぱ」	５名、グループ担当
サマー	R3	豊野西小学校	企画周知
サマー	R3	豊野東小学校	企画周知
サマー	R3	松代小学校	企画周知
サマー	R3	東條小学校	企画周知

サマー	R３	篠ノ井住民自治協議会	企画周知
サマー	R４	イーエムアイ・ラボ	５名、企画・運営
サマー	R４	信州アウトドアプロジェクト	１名、企画・運営・経過観察
サマー	R４	アソビーバナガノパーク	バス手配・昼食手配
サマー	R４	長野県立大学地域貢献サークル「ぐるんぱ」	グループ担当、９名
春	R２-３	長沼小学校	企画相談、周知、会場提供
春	R２-３	長野県立大学地域貢献サークル「ぐるんぱ」	グループ担当（R２：５名、R３：３名）
春	R２-３	ドンキホーテ（長野市の人気レストラン）	弁当手配
春	R２	NTT ながのサポーターズ	３名、ボッチャ指導者
春	R２	ボランティア	１名、運営サポート
春	R３	ボアルース長野	３名、フットサルの現役・元プロ選手

【対話】

長野市で災害時支援に関心をもつ団体や個人：事業概要の持続性で述べたように、本事業２年目に、本事業に取り組みながら、別途、令和元年東日本台風被災への緊急支援の振り返りや緊急時の子ども支援の在り方について学習会と交流会の機会をもった。子ども支援に取り組む NPO や保育園等と台風１９号の緊急支援の振り返りや緊急時の子ども支援について学習会や交流会を通して、緊急事態が起きた時により良い子ども支援ができるよう、対話を重ねた。その中で、緊急時の子ども支援を迅速かつ円滑に行い、長野市のすべての子どもが緊急時にも守られるようネットワークの立ち上げが検討されるようになった。そうして、２０２３年２月に長野市の緊急時には子ども支援を迅速かつ円滑に行えるよう、「長野市緊急時の子ども支援ネットワーク」が設立、連携していく仕組みの立ち上げへと展開した。

５．事業の成果

１）アウトカムの分析

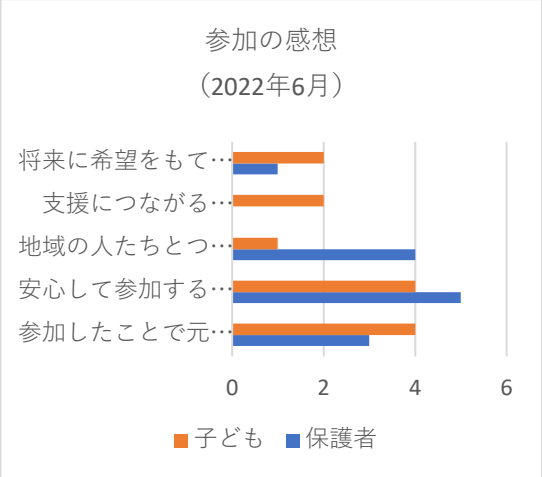
・長野市の台風１９号の深刻な被害を受けた長野市北部地域で、子どもがストレスを軽減している。

【留意点】参加者全員ではなく、アンケートを実施した日に参加していた子どもと保護者のみ。１００%の参加者が２回以上の利用がしており、全員にとったアンケートではなく回答数は少ないが、本活動への感想をおおよそ表すと考える。

特定した事実	考察（価値判断）
【ふるさと一週末の居場所】 ・開催状況一覧表で示したようにコロナ禍で	達成度：Ａ ・特定した事実より、保護者が子どもを安心

中止したこともあったが、週末の居場所を利用した子どもは、下の表に示されるように「参加したことで元気になれた」と「安心して参加できた」いう回答が最も多く、子どもがストレスを軽減する場になっている。
さらに、保護者の回答では「安心して参加」が最も多い。子どもの記述に「これからもやさしくしてほしい」とあり、スタッフへのインタビューで子ども同士のけんかもあったようだが、のびのびと安心して過ごせたと考える。

保護者の回答に「地域の人たちとつながり」が多く、本活動が多くの協力を得て取り組んだことが理解されている。例えば、昼食の提供には長野市のあたりで昔から食べられていたお惣菜を子どもに伝えたいという思いで子ども食堂に取り組まれている団体にこどもの城は共感し、お弁当を依頼していた。他にもプログラミングの時間や大学生による企画、夏休み特別企画として謎解きゲームのようにして楽しみながら、学びを深めた。



・昼食のお弁当について、残念ながら意図したことが伝わっていない場合もあった。上述したように、長野の昔からのお惣菜・郷土料理を知ってほしいという思いを伝えるなど、週末の居場所の意図や思いを参加している子どもや保護者に共有する機会を持つ余裕がなかった。アンケートではお昼ご飯に「大変不満」はないが、「やや不満」と回答する子ども若干

して送り出せる、子どもがストレスを軽減する場を提供できたと判断した。
・ふるさとでは、工作や公園に行く、なぞなぞなどボランティアスタッフの企画など、リフレッシュプログラムのような特別なイベントではなくとも、参加した子どもが楽しみ、感謝していることが事業終了月に届いた手紙に示されている。
・プログラミングという新たな学びの機会から、自分で工夫し学んだ以上のことをできるようになるなど、前向きな頑張り、成長がみられる。

事業の効率性：A
・こどもの城は、運営と子どもの安全に配慮し、外部の協力を取り入れることで、子どもが安心して過ごし、元気になれる場提供し、費用対効果が高いと判断する。
・しかしながら、この活動の目的が子どもや保護者に共有されるまでには至らなかった面も若干あることは否めない。コロナ禍により昼食をともにすることができなかったこともあり、単に昼食の提供ではなく、長野市の食文化を伝える意図が伝わっていなかったケースもみられた。コロナ禍での開催で、目的や思いをつたえきれなかったことは理解され、、効率性は高いと判断する。

<table>
<tr>
<td>名おり、「メニューを変えて欲しい」と回答した子どもは5人中4人であった。

・２０２３年３月の長沼小学校からの手紙で、参加した子どもはお昼を皆で一緒にお昼を食べたこと、工作、皆で公園に行ったこと、プログラミング、なぞなぞ・クイズと、特別なイベントではないことも楽しかったと記している。上述と反するが、お昼ご飯のおばちゃんへの感謝を記した児童もいる。
・プログラミングに興味を示す記述が８名おり、学びをいかして自分でゲームをつくれるようになった子どももいる。</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>【権堂】
・満足度
<table><tr><td></td><td>令和２</td><td>令和３</td><td>令和４</td></tr><tr><td>学習</td><td>７１％</td><td>８３％</td><td>４０％</td></tr><tr><td>食事</td><td>７９％</td><td>１００％</td><td>７０％</td></tr></table>
・自由記述には3年間を通して、「皆と遊べた」「他の子と勉強できて楽しい」「皆で食事ができて楽しい」と一人でないことを楽しいとする記述が目立つ。
・少数ではあるが、「うるさい」という記述もある。
・保護者の自由記述に、平日夜に安心して預けられる場があること、食事と学習の両方の支援や異年齢の子どもが参加し遊ぶ・交流の場となっていることを喜ばれている。
・保護者の自由記述に、「皆で食事ができて楽しい」「〇〇して楽しかった」「おいしかった」等々あり、子どもが保護者によく伝えている。
・訪問時に、大学生ボランティアが、勉強の嫌いな子どもを励まし、おだて、なだめと一生懸命取り組ませている様子が観察された。
・ＪＡ長野やフードバンク、地域の農家等から食材の寄付を受け、予算以上の食事を提供している。</td>
<td>達成度：Ａ
・平日の放課後の開催のため、学習（宿題を終わらせる）と食事（夕飯）、遊びの３つが含まれる。皆で食事というように、一緒にすごすこと、孤立を防ぐ場になっている。
・主な参加者は小学生だが、幼児から高校生までを対象としており、ボランティアが大学生から高齢者までと非常に幅広い人々が集っている。多くの人々と一緒に過ごせることは、子どもの健やかな成長を支えている。
・他方、少数ではあるが学習の場としては、遊び騒ぐ声がうるさく感じる子どももいることは留意されたい。
・参加した子どもが、保護者に食事や何をしたかを喜んで伝え、この活動が子どもと保護者のカンバセーションピースとなっており、子どもが満足している様子に保護者が喜んでいる。
以上から、保護者が子どもを安心して送り出せる、子どもが宿題をする、遊ぶ、夕飯を食べるといった健やかな成長を支える場を提供でき、達成度は高いと判断する。

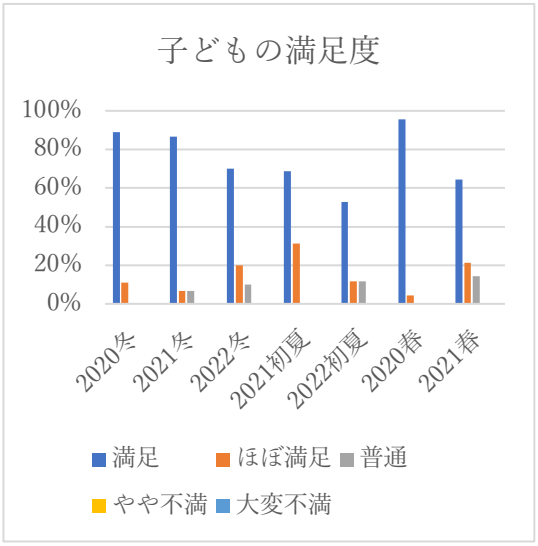
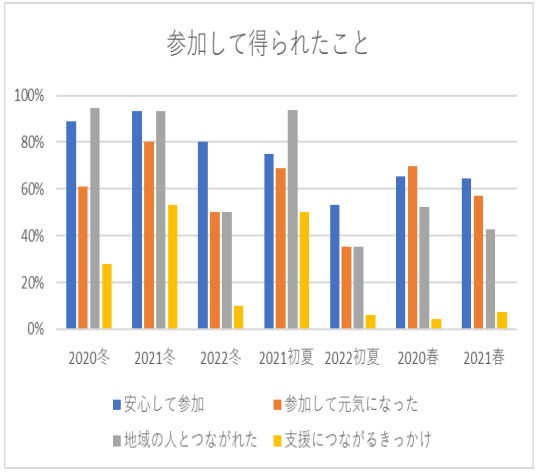
事業の効率性：Ａ
・ボランティアには大学生から高齢者まで幅広い。また、食材の寄付により、予算以上の食事を提供できている。</td>
</tr>
</table>

<table>
<tr><td></td><td></td></tr>
<tr><td>【学習支援】
・参加者の満足度は、満足・ほぼ満足が１年目は７５％（２５%は普通）、２年目３年目は１００%である。
・参加した子どもへのアンケートで、３年間を通して、１名をのぞき全員が「安心して参加できた」と回答している。
・参加した子どもへのアンケートで、「いろいろな人につながれた」との回答が１年目、２年目の参加者の半数程度いる。
・今後どのような支援を求めるかとの問いには、「学習環境」と「学習支援（指導）」が高い。
<table><tr><td></td><td>令和２</td><td>令和３</td><td>令和４</td></tr><tr><td>学習環境</td><td>８８%</td><td>８０%</td><td>７５%</td></tr><tr><td>学習指導</td><td>３８%</td><td>６７%</td><td>５８%</td></tr></table>
・「大学生・高校生から情報を得る場」との回答が、３年間を通して２０－３７．５%ある。
・事業２年目には、対象中学校の協力要請にこたえ放課後学習支援の運営、事業３年目には不登校の子どもの学習支援と、活動が広がっている。いずれも、コロナ感染状況の悪化により中止となったが、開始当初は事業終了まで望まれた。
・自由記述には「集中できる」、「静かに勉強できる」、「わかる問題が増えた」といった記載が目立つ。</td><td>達成度：Ａ
・参加した子どもの満足度が非常に高く、目標とした５０%を大きく上回った。また、参加者のほぼ全員が「安心して参加できた」と回答している。バーチャルで複数の会場をつないだことや学習サポートのボランティアがいたことで、普段知り合わない人々とつながる機会を提供できた。
・こどもの「学習環境」と「学習指導」、特に場を求めるニーズにこたえられた。
運営と子どもの安全に配慮し、外部の協力を取り入れることで、子どもが安心して学べる場所を提供し、子どもの学びへのニーズにこたえた活動だと判断する。
・さらに、参加者の通う中学校や、対象地域の不登校の子どもをもつ保護者の要請を受け、活動を広げており、活動が信頼を得て子どもの学ぶ権利を支える活動となっていることを示している。

事業の効率性：Ａ
・ステイホームの時期にはバーチャルを活用し、対面が可能となってからは複数の場所をバーチャルでつなぎ学習指導補助をできるだけ多くの子どもに届くよう配慮された。
・タブレットは、企業のサポートをうけ費用を抑えることができた。</td></tr>
<tr><td><u>費用対効果</u>
・子どもの居場所を公民館など公的施設で開催することで、会場借料を抑えることができた。</td><td>達成度：B
・毎週のように開催する子どもの居場所や公民館自習室などの会場借料を抑え、週末だけでなく要望に応じ平日放課後に開催するなど回数を増やし、被災だけでなくコロナ禍のストレスを子どもが軽減することに寄与できた。
・他方、公的施設の予約のため、スタッフが毎月奔走しており、今後の活動において、会場を確保し続けることの難しさは今後の課題でもある。</td></tr>
</table>

	・食材費については、長野 JA やフードバンク等の協力により、食材寄付を受け食事提供の予算を抑えられた。

・長野市の台風１９号の深刻な被害を受けた地域で、子どもが健やかな成長の機会を得ている。

特定した事実	考察（価値判断）
全リフレッシュプログラムの参加者アンケートで満足度は「満足」・「ほぼ満足」で８割以上である。 	達成度：A ・どのプログラムも「満足」の回答が非常に高い。保護者アンケートから、帰宅した子どもが保護者に活動を喜んで話す様子が記されるなど、子どもが普段とは違う日を過ごすリフレッシュの機会を提供できたといえる。
リフレッシュプログラムに参加した子どもの多くが、「安心して参加」できた、「参加して元気になった」と回答している。 	・リフレッシュプログラムが、子どもに安心して参加し元気になれる場を提供できたといえる。
リフレッシュプログラムの企画には、地元の団体の協力を得て、SDGs を考える子ども会議、自然観察、石窯でピザを焼く、などなど多様な企画を提供できた。	・本事業のスタッフや専門家だけでは取り組めなかった活動を、地元の団体との連携により、様々な経験を子どもに提供し、子どもの健やかな成長の一助となりえた。

・リフレッシュの保護者アンケートの記述に「楽しい・喜び」という記載が目立つ。
・リフレッシュの保護者アンケートの記述に「友」という記載が目立つ。
・リフレッシュの保護者アンケートの記述に「思い出」が目立つ。
・リフレッシュの保護者アンケートの記述に「感謝」の言葉が目立つ。

	冬	初夏	春
回答数	36名	23名	24名
楽しい・喜び	59	31	8
感謝	50	25	11
友	42	12	3
体験	38	20	2
経験	16	3	0
思い出	15	6	1
感謝（ありがとう・ありがたい含む）			
楽しい・喜び（楽しみ含む）			

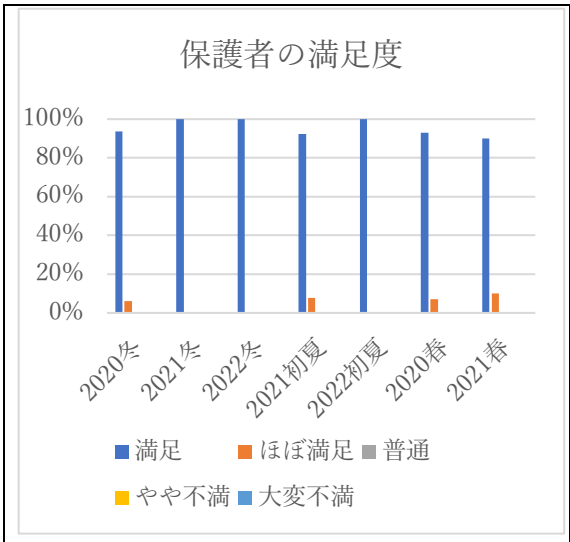
・子どもが「楽し」く「喜び」という言葉が帰宅した子どもの様子を示す言葉とし最もよく出てくる。帰宅した子どもが、楽しそうに嬉しそうに活動のことを話してくれたという記述もあり、子どもが楽しい時間を過ごせたことを保護者が喜んでいる。
・コロナ禍により休校や外遊びができないなど、子どもが自宅で過ごす時間が多いという記述もあり、保護者が本プログラムに子どもが参加することで、友だちとしっかり一緒に過ごせたことを喜んでいる。
・保護者が深い満足を覚えるほど、子どもが充実した時間を過ごす場を提供できたといえる。
・コロナ禍が収束せず、学校行事にも制限のある中、こどもの城が子どもの安全に配慮は保護者の理解を得られた。次いで、「参加することで元気になった」の回答が多く、子どもが安心して発散しリフレッシュする場を提供できたといえる。

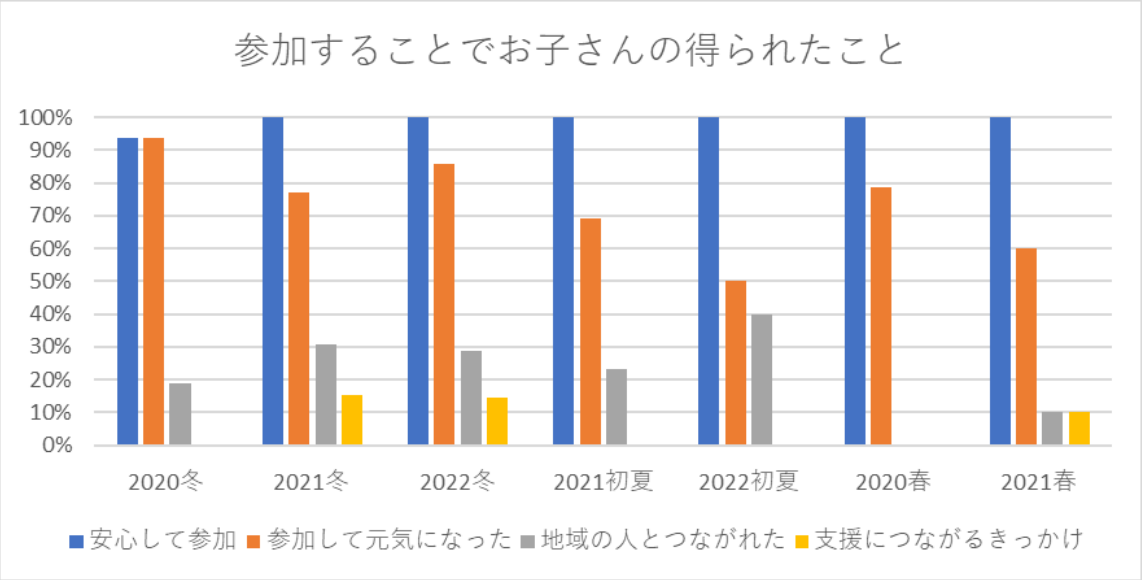
２０２３年３月、長沼小学校からの手紙より
・２４名の子どもの手紙は、たくさんの思い出ができたことを伝えている。中でも、一泊二日のウィンターキャンプは、精進料理から宿坊宿泊、ホテルのバイキング昼食、SDGs の学び、善光寺の朝事、野外活動と、子どもによって記す活動は異なるが、よく覚えていることがわかる。
・サマーキャンプで、ドローンやヤギの餌やり、ピザを焼いて食べたこと、子どもによって印象に残った活動は異なるが、楽しんだことが記されている。
・スタッフインタビューで、ウィンターキャンプの参加者はふるさとの参加者でない子どもの多く、迎えのバスでは少し緊張しているが、送りのバスではとてもうれしそう、興奮した様子がよく印象に残っているという。

台風被災からの生活再建に加え、コロナ禍で宿泊学習など子どもの楽しみにしている学校行事が中止になるなど、子どもの良い思い出になるはずの機会をなくしていることを、リフレッシュプログラムが補完しといえる。保護者の中には子どもに「申し訳ない」というような思いを記しており、子どもの健やかな成長を支える一助となったといえる。
リフレッシュプログラムを通じて、子どもが「楽しみ」、普段できない「体験」をし、「友」と一緒に過ごし、「思い出」を作り、台風の被災やコロナ禍が重なり、保護者が子どもにしてあげたい・望んでいることを提供できたので、感謝の言葉につながっていると判断する。子どものストレス解消や発散、心の傷の癒しはもちろんのこと、保護者の心に寄り添う活動でもあったと判断する。

全リフレッシュプログラムの保護者アンケートで、「満足」は９０％以上、ほぼ満足を含めると全プログラム１００％満足されている。

事業の効率性：A

	１つの団体だけでは難しいが、地域の多くの人々や団体に協力を仰ぎ、子どもたちに多様な経験を提供できている。
全リフレッシュプログラムの保護者アンケートで「安心して参加させることができた」が１００%あるいはほぼ１００%である。 次に参加することで元気になった」が高く、５割以上である。 参照：欄外の下の表	



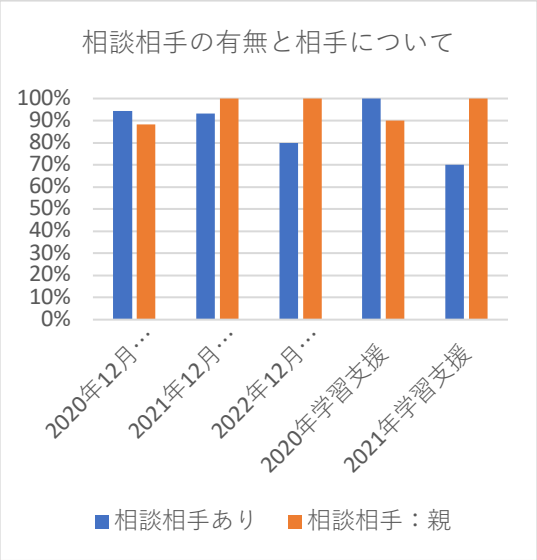
・本事業を通して、地域の人たちとのコミュニケーションの場や学習の機会を得ることで、子どもたちが自らの生き方に主体性を持ち、積極的に社会に参画していけるようになる。

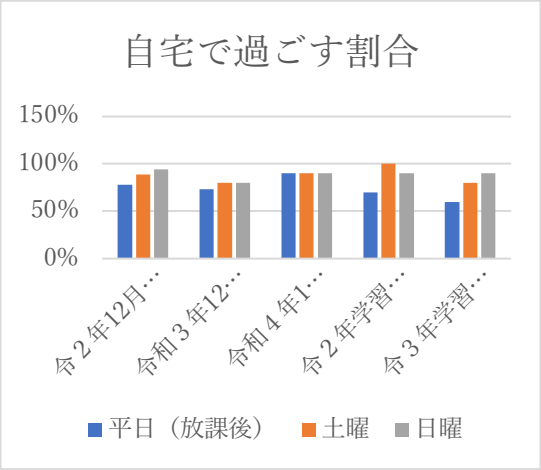
特定した事実	考察（価値判断）
冬のリフレッシュプログラムに参加後のアンケートより ・参加した子どもの感想として、１－２年目は「いろいろな人とつながれた」が９５%に近く、「参加して元気になれた」よりも高い。	達成度：A ・普段の生活で接する保護者や教員以外の大人、多様な背景や活動に携わる人々に接したことが明らかである。SDGｓの学びと合わせ、地域の活動に参加経験のない子どもが、今後

３年目は、２つは同じ回答率５０%で、下がるとはいえ半数はいろいろな人につながれたと感じている。 ・地域の活動に参加経験のない子どもが、今後参加したいという回答がほぼ１００%である。	参加したいと回答したと考える。 ・リフレッシュプログラムが、子どもが地域に目を向ける一助となっている。 ・本活動を通じて、台風１９号に被災した子どもが、「元気になった」「頑張る」と前向きになっている。
リフレッシュプログラムの保護者アンケートで、「参加することで得られたこと」に対し、参加した子ども、保護者の回答で「地域の人とつながれた」が２割から４割と回答している。	・教員アンケートに、子どもが思いやりやされたことに気づきがあると記され、子どものからの手紙に「こどもの城が自分たちのために頑張ってくれた」とよく理解しており、心の成長がみられる。
・２０２０年秋の教員アンケートでは、表面的には前向きだが体調や心に見えない影響や言えないことを抱えているのではと全学年の担任教員が記していた。 ・長沼小学校教員アンケート（２０２３年３月）で、担任教員の感じる児童の様子として、４年生は「人のことを思いやり、協力しあおうとしている」、５年生は「防災教育がすすみ、（児童が）支えていただいたことを改めて気づいた」、６年生は「防災について学習し、前向きに今後を考えている」とあり、前向きな様子がうかがえる。 ・長沼小学校からの手紙（２０２３年３月、５－６年生児童３６名中２４名から）で、「元気になった・元気が出た」と７名が記し、「頑張っていく」と５名が記している。 ・また、こどもの城への「ありがとう」と「感謝」はそれぞれ２３か所、「〇〇してくれた」、「頑張ってくれた」、「支えて」とこどもの城の支援に気づく記述が２２か所ある。 ・児童の中には、「子供の城のみなさんが、頑張ってくれた様に、私もがんばります」というように、こどもの城の姿勢が児童を励ましている。 ・こどもの城は、自分たちへの支援が終わると、他の場所の被災を支援をすると考え応援する児童が５名いる。	・高学年になると、被災を振り返ることができ、防災を学び、前向きになっている様子が、教員アンケートやスタッフインタビューからわかる。 ・子どもの中には、自分たちのために頑張ってくれるこどもの城が、自分たちだけでなく他の場所、被災者を支援していくと他者を想像（思いやり）がみられ、被災から学び成長がみられる。 ・具体的に地域に対し、何かをする計画が見られないが、支えられたことに気づき感謝する心、他者への思いやりや他の被災者への思いやりが育まれている。これは、「自らの生き方に主体性を持ち、積極的に社会に参画していけるようになる」土台を子どもたちが育んだと判断する。 事業の効率性：B ・コロナ禍で計画よりも開催数は少なかったが、子どもが元気になった、頑張ろうと前向きな様子がみられ、密度の濃い活動ができたと判断する。

・スタッフインタビューで、「子どもの身近な大人は保護者や学校の先生で、第３の身近な安心できる大人として寄り添う」姿勢を聞かれた。 ・また、「１年目は台風１９号について話すことは憚られたが、２年目くらいから子どもの心の整理ができてきたようで、話しやすくなった」と聞かれた。	

・台風１９号の深刻な被害、コロナ禍と続く中、子どもが家庭で伸び伸び過ごしている。

特定した事実 ２年目の令和３年度末に長沼小学校の協力を得て、全保護者を対象にアンケートを実施。 ・「ふるさと（週末の居場所）」は、これまで参加経験のある保護者はほぼ１００%継続希望 ・希望回数は月１－２回に集中のため、最終年の令和４年度は毎週から隔週開催に変更 ・小学校高学年が参加する冬のリフレッシュプログラム、中学生が主対象の学習支援のアンケートで、悩みと相談相手を質問。悩みがあるとの回答は平均して４０%程度である。下の表で示されるように、「相談相手がいる」という回答は７０%から１００%と高く、相談相手の約９０%から１００%が親である。  	考察（価値判断） 達成度：B 小学校高学年から中学生と思春期を迎えた子どもは、約４割が悩みを持ち、相談相手のいる子どもが大半である。相談相手の９０%から１００%が親と回答し、親との関係が良好であり、自宅でのびのびと過ごせていると判断する。 本事業との相関関係があるとまで言える材料がないが、参加の満足度がほぼ１００%であることと支援の継続を望む回答の高さから、本事業が被災からの生活再建につかれた保護者に一定の癒しと不安の解消に貢献したと判断する。



コロナ禍でステイホームが続き、子どもが過ごす場所も表で示されるように、自宅率がかなり高い。保護者アンケートにはゲームのし過ぎや YouTube の見過ぎを心配する記述や回答もあるが、子どもは居心地のいい場所として自宅を挙げ、落ち着く・親や家族がいる・気を使わなくてよい等々と記載している。

２０２３年３月長沼小学校児童の手紙に、支援物資（フードパントリー）を感謝する記述の中で、母親が喜んだことを子どもが喜ぶと記す児童が２名いた。

２）アウトカムの達成度

（１）短期アウトカムの計画と実績

短期アウトカム	指標	初期値/初期状態	目標値／目標状態	目標達成時期	実績値
長野市の台風１９号の深刻な被害を受けた長野市北部地域で、子どもがストレスを軽減している。	１．こども・保護者へのアンケート ２．子どもの参加人数、リピート率 ３．ヒアリング（保護者・スタッフ・ボランティア）	参加する子ども・保護者へのアンケート／ヒアリングにより把握。 避難所支援終了後のアンケート（３月実施）で、一部保護者から子どもが避難所が楽しかったと懐かしむという記述があるなど、被災からコロナ禍でままならない日常にかなりのストレスがあると考えている。	１．５割以上 ２．定員の６割以上を満たし、リピート率が４割以上 ３．ヒアリング　過半数の＋評価 ・保護者やスタッフ、ボランティアへのヒアリングの中で、子どもたちの前向きな様子の変化がみられる。	２０２３年３月	１．とられたアンケートの平均値より、高く達成と判断 ２．達成。３年間を通じて子どもの居場所の活動には参加者の大半がリピートしており、大きく達成。なお、コロナ禍により定員の６割以上を含めない。 ３．達成。保護者アンケート、スタッフインタビューから子どもが前向きに変化したと判断される。
長野市の台風１９号の深刻な被害を受けた地域で、子どもが健やかな成長の機会を得ている。	１．こども・保護者へのアンケート ２．ヒアリング（子ども・保護者・スタッフ・ボランティア） ３．本事業のイベント運営等への子どもたちの参加率	事前の保護者へのヒアリングで避難所閉鎖後すぐの冬休みに旅行するような精神的な余裕がなかったと聞いている。その後のコロナ禍により、春休みやゴールデンウィークは自然体験や旅行など非日常を楽しむ機会は一切なかった。被災、コロナ禍からのリフレッシュの機会はほとんどない。	１．５割以上 ２．ヒアリング　過半数の＋評価 ３．５割以上	２０２３年３月	１．高く達成。すべてのリフレッシュプログラムのアンケートで＋評価が１００％ ２．スタッフインタビュー、保護者のアンケートから＋評価が１００％ ３．コロナ禍によりイベント運営にまで子どもの参加は不可能だった。

本事業を通して、地域の人たちとのコミュニケーションの場や学習の機会を得ることで、子どもたちが自らの生き方に主体性を持ち、積極的に社会に参画していけるようになる。	１．こども・保護者へのアンケート ２．子どもの参加人数、リピート率	台風による災害とコロナ禍で、ストレスや不安を感じ将来の生き方に迷いを感じている。	１．６割以上 ２．定員の５割以上を満たし、リピート率が４割以上	２０２３年３月	１．達成。アンケートの回答から、少数ではあるがストレスや不安を感じる子どもがいたが、保護者をはじめ相談できると回答。 ２．達成。子どもの居場所はどの活動もリピート率が高い。なお、コロナ禍により定員の６割以上を含めない。
台風１９号の深刻な被害、コロナ禍と続く中、子どもが家庭で伸び伸び過ごしている。	１．こども・保護者へのアンケート ２．ヒアリング ３．保護者の参加人数、リピート率	事前のヒアリングで、①子どもの学習、②子どもの成長、③コロナ感染と台風１９号の被災とコロナ禍が合わさり、子どもの成長に不安を感じていること、保護者本人もまたストレスを抱えていることがわかっている。	１．６割以上 ２．ヒアリング　過半数の＋評価 ３．定員の３割以上を満たし、リピート率が４割以上	２０２３年３月	１．達成。子ども、保護者のアンケートから活動によりストレスを軽減している。 ２.達成。保護者アンケート、スタッフインタビューにより子ども、保護者ともにストレスを軽減している。 ３．達成。子どもの居場所のすべての活動でリピートして参加する子どもは４割以上。なお、コロナ禍により定員の３割以上は含めない。

２）アウトカム達成度についての評価
達成：A
　コロナ禍が収束せず、計画の修正や中止せざるを得ないこともあったが、上述のように、子どもが被災の心の傷をいやし元気になることだけでなく、保護者の子どもを心配し不安に思う気持ちを和らげることに寄与していることから、４つのアウトカムを達成できたといえる。

　子どもの居場所事業によって子どもに「安心安全な場」を継続的に提供してきたこと、リフレッシュプログラムによって日常から離れ心身ともに発散し楽しい時間であり場を提供してきたこと、この両面からのサポートが甚大な被害にあった経験に加え、コロナ禍によりストレスや不安を抱えた子どもを支えることができた。

３）波及効果（想定外、波及的・副次的効果）
・復旧復興支援に取り組む３年間を通じて、行政や地元の子ども支援団体、ライオンズクラブやコープ、フードパントリーなど多様な団体の協力を得てきた。緊急支援に取り組み始め、１団体の限界を痛感し、緊急時に速やかに子どもを守れるよう、長野市に災害時の子ども支援を速やかに円滑に包括的に取り組めるよう、災害時の子ども支援について学習会や交流会を２年目より本事業に取り入れた。この活動から、参加したメンバーを中心に「長野市災害時の子ども支援ネットワーク」の立ち上げへと波及した。

・子どもの居場所として中高生の学習支援を続ける中で、不登校の子どもの保護者会から相談を受け、公民館で平日に学習会を開催することとなった。避難所においても、被災のショックから一時的に通学できなくなるなど、どの子どもにとっても他人事ではない。復旧復興支援に取り組む中で、子どもの直面する課題への取り組みが広げられた。

・学習支援に参加する中学生にヤングケアラーとして幼い弟の面倒を見るため、本人の望んだ対面での参加はできなかったが、バーチャルでは参加できた。バーチャルでの開催の意義を再確認する機会であり、また子どもの学ぶ権利をどう守るか―ヤングケアラーの課題について考えるきっかけとなった。

４）事業の効率性
達成：B
・コロナ禍の影響により、参加者０あるいは非常に限られた参加者数のこともあった。しかしながら、子どものアンケートからは、子どもの居場所では黙食であったにも拘わらず皆と一緒に食事をしたことが楽しかったとの回答が多いことをはじめ、２０２３年３月の長沼小学校児童の手紙では、公園や工作など特別なイベントでないことを楽しか

ったとして記されており、密度の高い活動になったと考えられ、コロナ禍での事業として効率性は妥当と考える。

６．事業の成功要因と課題

本事業はかかげた４つの成果を達成した。４つはそれぞれ別の活動ではあるが、密接につながっており、個別に要因を探るのではなく本事業の成功要因としてまとめる。

【要因】

・子どもや保護者に「寄り添う」姿勢

インタビューできた全スタッフが、子どもを子どもという括りではなく個々の人格をもつ一人一人に接しているという姿勢が共通していた。子どもを見張っているのではなく、見守る姿勢である。

こどもの居場所で子どもはのびのびと過ごし、こどもの居場所のアンケートで、「スタッフにこえをかけやすい」・「スタッフとの会話が楽しい」の回答率が高く、「これからもやさしくしてほしい」といった自由記述にも表れている。また、２０２３年３月に長沼小学校から届いた児童の手紙にも、「やさしくされた」や「話しやすかった・話しかけやすかった」と書かれている。

子どもは、こどもの城の寄り添いをしっかり気付いている。被災という心に深いダメージを受けた子どもは、学校で振り返りや防災の学習を通じて、教員が指摘するように「他者への思いやり」を育み、支えを感謝できる心の成長を遂げている。長沼小学校の児童からの手紙に、振り返ってたくさんの思い出を懐かしみ、それらを支えてくれたのはこどもの城だという気づきが書かれている。この成長の一端を「寄り添う」という姿勢で支えたのが本活動である。

本事業のそれぞれの活動に、リピーターとなる子どもが多かったのは、子ども一人一人を尊重し、子どもに寄り添い、子どもにとって安心安全な場の提供に尽力したことが大きいと考える。

・外部との連携

３年間の事業を通して、幅広く柔軟に外部との連携がみられる。

子どもの居場所、リフレッシュプログラムには、それぞれ多くの活動があり多様なアクティビティが盛り込まれていた。ハレの活動リフレッシュプログラムはいうまでもなく、日常の活動子どもの居場所でも、学生や長野に住む芸人で寺子屋の主催者の協力を得ていた。１つの団体だけでなんでもしようではなく、地域の様々な活動をする団体や企業との連携により、文化からスポーツ、学習から遊びまで幅広く子どもの健やかな成長を支える場を提供できた。

安全面においても、コロナ禍での活動で感染予防の徹底と同時に、学校や行政、医療関係者に相談し助言を得ている。

多種多様な外部の協力を得られたことは、本事業の成功の大きな要因である。

【課題】

・事業運営体制の強化

外部要因としてあげていたコロナ禍が収束せず、対面での活動は事業期間を通じて制限せざるを得なかった。そのような中、細心の注意を払い、医療をはじめ専門家や行政、学校など関係各所に相談しながら、活動を継続したこどもの城の「子どもが被災で受けた心の傷をいやし、前向きに生きることを支える」という強い信念の結果である。

しかしながら、状況が不安定な中、活動を継続するために事業統括など一部は休みを取ることができないなどしわ寄せがみられた。本事業は、コロナ禍の中での実施で、業務量の見通しが立たなかったゆえにスタッフの配置が難しかったと思われるが、今後の事業計画には、継続できる組織体制を考慮されたい。

７．結論

１）事業実施のプロセスおよび事業成果の達成度の自己評価

	多くの改善の余地がある	想定した水準までに少し改善点がある	想定した水準にあるが一部改善点がある	想定した水準にある	想定した水準以上にある
（１）事業実施プロセス					◎
（２）事業成果の達成度					◎

（１）事業実施プロセス

【留意点】事業実施期間はコロナ禍が収束することはなく、子どもが集まる居場所の開催やリフレッシュプログラムは、開催するか否かを含め難しいこともあった。

上述より、コロナ禍の大きな影響下で、想定した水準以上にあると判断する。

どの活動においても、参加した子どもやその保護者アンケートで「安心して参加できた」の回答が高い。これは、コロナ禍での開催に医療関係者や行政に相談しつつ、開催の可否を慎重に判断し、開催時には感染予防に細心の注意を払って開催してきた結果であろう。また、事業統括をはじめ本事業担当者が出席する責任者会合を毎月開催し、事

業の進捗や会場予約等事業の運営・報告や情報共有の機会を設け、スタッフ間の情報共有に配慮された。

（２）事業成果の達成度

上述より、コロナ禍の大きな影響もありながら、想定した水準以上にあると判断する。

【有効性】
・参加した子どもの満足度の高さ、保護者が子どもの満足度を高く評価していること、子どもの地域社会の活動への関心を促されている回答から、本事業は有効だと判断する。
子どもの居場所：本事業２年目となる令和３年度末に主たる対象の小学生、長沼小学校の保護者を対象に被災後の子どもの様子や本事業への要望についてアンケートを実施した。長沼小学校の協力を得て全保護者を対象とし、回収率は６０．９％であった外遊びができず退屈している・ゲームのし過ぎが気になるという回答とともに高学年は自宅学習期間中の生活が落ち着かなくなっている。４年生までは自宅学習期間も通学時と変わらない起床時間が、高学年になると５０%程度が遅くなっている。また、学習も中々やる気がでないようだという回答が５年生は６４%、６年生で４４%と高い。そのような中、週末の子どもの居場所の利用は４－５年生で高く、ほぼ全員が継続を望みこれから利用したいという声も若干ある。利用したい支援として、過半数に近い保護者が週末の居場所と回答している。
リフレッシュプログラム：春はスポーツを冬と初夏は多様な体験プログラムが満載で、春はスポーツイベントである。子ども、保護者ともに満足度が非常に高く、満足・ほぼ満足でどのプログラムも９割（２０２２初夏は子ども８８%）で、保護者は７回中３回が１００%満足、４回は９割以上が満足で残りはやや満足である。保護者の満足度は、アンケートの記載によれば、子どもが日常では触れることのない様々な体験を通して学びや楽しみを得たこと、帰宅後、嬉しそうに・喜んで参加したプログラムについて話したことである。子どもも保護者も「安心して参加」できたという回答が非常に高く、コロナ禍に開催するための細心の配慮が理解されている。また、令和３年度末の長沼小保護者アンケートでもまた、４・５年生の保護者が８割以上、６年生の保護者は１００%望んでいる。以上から、有効だと判断する。

【妥当性】
２０２０年１０月、避難所支援から支援を続け本事業の主対象である子どもの通う長野市長沼小学校教員アンケートで、ほぼ日常を取り戻しているという回答は１学年だけで、６学年の担任が自宅再建に奔走する保護者や子どもは一見日常を取り戻しているようであるが被災の影響が心配する記述ばかりである。事業期間中に取られた保護者アンケートでは、２０２０年度には被災からの生活再建のため週末に預かってもらえることが

ありがたいという記述が目立つ。２０２２年度には大雨を嫌がる・怖がるなど何かしらの不安を感じている記述もあるが、災害は過去のことという記述も出てきている。。避難所での子どもの居場所から避難所閉鎖後の週末の居場所の延長である本事業は、必要とされており、妥当だと判断する。

【インパクト】
子どもの居場所事業を通じて、子どもの抱える多様な課題が浮き彫りになり、実施団体の他事業を紹介するなど対応している。２０２１年度には、学習支援に参加する子どもの多い豊野中学校の依頼を受け、豊野中学校放火簿学習支援の開催（２０２２年１月コロナにより中止)、２０２２年１０月には不登校の保護者の会から依頼を受け、平日の学習支援を開催しており、広義の効果がみられインパクトがあると判断する。

２）事業の妥当性
上述から、「妥当」と判断する。

事業の効率性
事業費は計画内に収まり、計画よりも多くのボランティアを含む人材や食材など寄付物資もあった。参加する子どもはリピーターが多く、満足度も高い。さらに保護者の感謝や子どもを安心して預けられた・参加できたとの記述が多い。また、リフレッシュプログラムにはNPOや企業など多様な団体から協力を得られたのはNPOならではである。以上から効率性は高いと評価する。

組織基盤の強化
【連結性・持続可能性】
災害支援の本事業から、平時の子ども支援へと展開し、２０２３年４月より常設の子どもの居場所を開催する。これは、３年目の保護者アンケートの記載に台風被災の子どもへの影響を心配し本事業の終了を不安に思う保護者への回答にもなる。
さらに、本事業と並行して、令和元年東日本台風の緊急支援の振り返りや災害時の子ども支援について、学習会や交流会を開催し他団体と学びあった。。そうして、災害が発生する万が一の場合に備え、緊急時の子ども支援のためには、平時から連携することを検討されるようになった。2023年2月には、「長野市緊急時の子ども支援ネットワーク」が立ち上げられ、緊急時にも子ども支援を守る仕組み作りに取り組んでいく。
以上から本事業の連結性・持続可能性は高いと判断する。

８．提言

地域の子ども支援団体が、突然の災害により緊急支援に取り組み、復旧・復興支援に取

り組むことに寄せて、提言したい。

１．現場の観察やアイデアをくみ取る仕組み
スタッフへのインタビューにより、どのスタッフも一人一人の子どもを尊重しよく見ている。その分、子どもと接することで得られるアイデアを持っている。それらをくみ取り事業に反映させていくことができれば、さらによい活動になろう。〃

２．事業の目的や方針の共有
ボランティアを含め多くの人材が善意でかかわったと思われるが、事業の目的や方針を共有しきれていなかったようである。また、保護者アンケートの自由記述にも対象や目的がはっきりせず他の方にすすめづらいという指摘もあった。子どもも保護者も参加する活動となるよう、今後の活動では参加する子どもも含めスタッフやボランティア、かかわる人々で共有されたい。

３．子どもの参加
これまでも、活動には子どもの声をきき取り入れているが、災害時の子ども支援や防災においても、子どもの参加を促したい。子ども・若者が防災を考える機会であり、緊急時の備えになろう。

４．子どものセーフガーディングの周知徹底
ネットワークにおいて、早々に子どものセーフガーディングに取り組まれるだろう。その折に、何よりも子どもにセーフガーディングの存在の周知徹底が望まれる。緊急時には、大変な数の支援団体やボランティアが集中する。何かおかしい、イヤだと思えばそれを我慢せず口に出していいことは、平時の理解が望まれる。

５．防災－緊急時の子ども支援のために
災害時には、その規模や被害の状況によって情報が錯綜し、混乱が生じる。窓口となっている長野市子ども未来部とは、緊急時にも情報共有が確実になるよう、いつどこでだれが発表したのかなど、早急に緊急時の情報共有体制を検討されたい。
災害時の子ども支援のための連携の種－「長野市緊急時の子ども支援ネットワーク」－が、本事業の活動で取り組んだ学習会や交流会を通して事業の終了時に蒔かれた。運営委員へのヒアリングでは、ネットワークの構築で終わりではなくこれからが始まりだと複数の委員から聞かれ、決意と意気込みをうかがうことができた。
行政との連期は、長野市子ども未来部が行政窓口を引き受け、窓口が一つになったことから、０歳から１８歳までの長野市のすべての子どもに関連する諸部署との連携が可能となった。緊急支援では、避難所で乳幼時から小学生、数は少なくとも中学生や高校生をもサポートしていた。提供される情報の変化・修正が早く、関連する部署があちこち

にあり、戸惑いも混乱もあった。行政の窓口が１つになったことで、行政から提供される子どもに関する情報がまとまり、またこちらからの相談も容易となった。非常に大きな一歩であり、今後は、実際にどのように動くのかなど、より具体的に連携を進められたい。特に場所の確保は、行政の理解が得られることが必須であろう。
さらに、学校、幼稚園や保育園等の子どもが長い時間を過ごすところとも、ネットワークのメンバーを通して顔の見えるつながりができることが望まれる。子どもを取り巻く環境には、直接また間接に多くの人々や組織がかかわっている。例えば、本事業では、ライオンズクラブと連携したリフレッシュプログラムもあった。また、公民館や地域の施設など、場所の提供も大きい。今後、長野市の子どもの健やかな成長を、平時にも緊急時にも守っていけるよう、広く一般に周知され寄付や何より参加につながるよう、オープンなネットワークであることが望まれる。

９．知見、教訓

本事業の成功の大きな要因は、多くの団体と協力したことで、実施団体が得意とする分野だけでなく多様な活動を子どもに提供できたことである。子どもの健やかな成長は、学校をはじめ関係諸機関や地域、団体など多様な支えによっている。
調整は大変ではあるが、できるだけ多くの協力や連携が望まれる。

・包括的な連携の立ち上げ

復旧復興支援として本事業に取り組む中で、その出発点である令和元年東日本台風被災への緊急支援への取り組みを振り返り、万が一、次に緊急事態が起きた場合に、より子どもを守り健やかな成長を支える支援を考えるようになった。

長野市に緊急事態が起きた場合に、長野市に暮らすすべての子どもに迅速かつ円滑に支援を届けられるよう、緊急支援の取り組みの振り返りを中心に学習会や交流会を本事業と並行して取り組まれた。学習会や交流会を続けるうち、緊急時の迅速で円滑な支援には平時のつながりが重要だと会の考えがまとまり、事業終了直前、２０２３年２月に長野市緊急時の子ども支援ネットワークを、長野市で子ども支援に取り組む団体と立ち上げへとつながった。今後の防災や長野市における緊急時の迅速かつ円滑な子ども支援が期待される。